

英語における3つの構文間の継承関係

— Time-away 構文・結果構文・使役移動構文*—

宮田 明子

1. はじめに

英語には、以下(1)にみるような Time-away 構文と呼ばれる構文がある。

- (1) a. Fred drank the night away. (Jackendoff 1997: 535)
b. John played his youth away.

(1a)は「Fred は一晩飲み明かした」という意味であり、(1b)は「John は青春時代を無為に過ごした」という意味である。Time-away 構文は、(1a, b)に見るように、[NP1 V NP2 away] という形式で表され、いわゆる目的語 NP2 の位置には時を表す名詞句がくる。そして構文全体で「(無駄に) ある時を～して過ごす」という意味を表す。

Time-away 構文と形式的に類似した構文に、(2a)のような使役移動構文 (Caused-Motion Constructions) と (2b) のような結果構文 (Resultative Constructions) がある。

- (2) a. The dog frightened the thief away.
b. Diet those pounds away! (Jackendoff 1997: 550)

これら2つの構文では、away 以外の表現も可能だが、(2a)や(2b)のように away がその位置を占めた場合には、一見したところ、Time-away 構文との区別が明確でなくなる。(2a)は「犬にびっくりして泥棒は逃げ去った」という意味であ

* 本稿は第17回日本英語学会(1999年11月6・7日、於：成蹊大学)において口頭発表した原稿および宮田(2000)の論文を、さらに発展させたものである。本稿執筆にあたり藤原保明先生、中右実先生、廣瀬幸生先生、加賀信広先生、編集委員の先生方から有益なご助言を戴いた。また、本多利仁氏、金薫成氏から貴重なご意見を戴いた。心より感謝の意を表したい。言うまでもなく、本論文中の不備はすべて筆者の責任によるものである。

り、(2b)は「減量をして体重を落としなさい」という意味である。つまり、(2a)は、威すという行為の結果として生ずる泥棒の移動、すなわち、泥棒の位置変化を表しているのに対して、(2b)では、ダイエット後の体重の減少という状態変化が表されているのである。したがって、この2つの構文は、形式的に類似しているだけではなく([NP₁ Y NP₂ XP] 尚、ここでは、XPは*away*)、意味的にも種類は違うが目的語の名詞句の変化を表しているという点で類似している。Goldberg (1995)によれば、結果構文と使役移動構文の間にこのような類似関係が見られるのは、〈CHANGE OF STATE IS CHANGE OF LOCATION (状態変化は位置変化である)〉(cf. Lakoff and Johnson (1980), Lakoff (1990))というメタファーによって前者は後者から拡張されたものであるからであり、ゆえに、両構文間には継承関係が認められると指摘されている。¹

さらに、結果構文とTime-away構文の比較研究に関しては、Jackendoff (1997)がある。Jackendoffは、この2つの構文の間には関係がないと結論づけているが、宮田(2000)では、両構文間には形式的にも意味的にも類似性が見られることから、一定の継承関係によって関連づけられると主張した。

本論文では、さらに、Time-away構文と使役移動構文の関係を探ることによって、結果構文を含む上記の構文間の関係を明らかにしていきたい。

2. Time-away 構文と結果構文

前節でも触れたように、宮田(2000)では、Time-away構文は結果構文と継承関係にあることを主張し、これら2つの構文は関連をもたない構文であるとするJackendoff (1997)とは異なる見解を示した。なかでもJackendoffの主張と異なる点は、*away*に関する見解である。Jackendoffによれば、Time-away構文に生じる*away*と結果構文の結果句として生じる*away*とは、アスペクトの点で異なると指摘されている。アスペクト、すなわち、表される事態の完結性(*telicity*)を調べる一つの方法に、*for*や*in*などの時間表現を付け加えることによるものがある。Jackendoffは、Time-away構文は構文全体で「ずっと～して時を過ごす」という意味を表すことから(cf. *Bill slept the (whole) afternoon away.* ⇐ *Bill slept for the (whole) afternoon.*)、この構文に生じている*away*は、

¹ 継承関係とは、構文間の関係を捉える概念で、構文文法の文法理論に基づいている(Goldberg (1995)など参照)。構文文法論とは、Fillmore, Kay and O'Connor (1988)などによって提唱された、構文という伝統的な概念が文法記述上の基本単位であると考えられる立場である。

(3a)に見るような、for の時間表現と共起する atelic (未完了) な事態を表す継続用法の away であると分析している。結果構文の結果句は、一般に(3b)に見るように、in の時間表現と共起することから telic な事態を表す。

- (3) a. Beth whistled away *in an hour/for hours .
 b. Beth grew tall in a year/*for a year.

(Jackendoff 1997: 550)

それに対して、宮田 (2000) では、Time-away 構文に生じる away を telic な結果用法の away であると結論づけた。² 宮田 (2000) で示したように、Time-away 構文の away は「結果」の away と同じふるまいを見せるのである。(4)を見てみよう。

- (4) a. kick away the dog / kick the dog away (結果)
 b. kick away at the dog / *kick at the dog away (継続)
 c. sleep the afternoon away / sleep away the afternoon (Time-away)
 (宮田 2000: 100)

「結果」の意味を表す away は、(4a)に示されるように、目的語の前後に生じることができるのに対して、「継続」の意味を表す away は、(4b)に見るように、動詞と離れて生起することはできない。Time-away 構文の away は(4c)に見るように、結果用法の away と同じように目的語の前後に生じることができるのである。

また、Jackendoff 自身も指摘しているように、entirely などの副詞との共起関係においても、Time-away 構文の away と「継続」を表す away ではふるまいが異なる。

- (5) a. *Sally waltzed {entirely/partly/half} away. (継続)
 b. Sally waltzed the afternoon {entirely/partly/half} away. (Time-away)
 (Jackendoff 1997: 540)

² 宮田 (2000) での論点は草山学氏の指摘による。ここに記して感謝の意を表したい。また、away の2つの用法については、Bolinger (1971)、草山・宮田 (1999) を参照されたい。

- c. Sally kicked the dog entirely away. (結果) (宮田 2000: 100)

(5a)に見るように、自動詞と共起して「継続」を表す away は、entirely などの副詞とは共起できない。それに対して、Time-away 構文の away は、(5b)に見るように、このような副詞と共起する。このふるまいは(5c)に見る「結果」を表す away と同じである。

さらに、構文全体が表すアスペクトの点においても、Time-away 構文は、「結果」を表す away と同じふるまいを示す。

- (6) a. *It took a month for Lois and Clark to finally get to dance away.

(継続)

- b. It took a month for Lois and Clark to finally get to dance two blissful hours away. (Time-away)

(Jackendoff 1997: 540)

- c. It took two minutes for John to finally get to kick the dog away.

(結果) (宮田 2000: 101)

Jackendoff (1997: 540) が指摘するように、継続用法の away は、(6a)から明らかかなように、文全体で atelic な事態を表すのに対して、Time-away 構文は、(6b)に示されるように、構文全体で telic な事態を表す。(6c)に見るように Time-away 構文のアスペクトは、結果用法の away が示すそれと一致するのである。

先にも述べたように、Jackendoff (1997) は、Time-away 構文が「ある時をずっと～して過ごす」という意味を表すことから、この構文に生じる away は、継続用法の away であると結論づけているが、以上のことから明らかかなように、この主張には Jackendoff 自身も認めているように決定的な証拠はない。むしろ事実、この構文に生じる away は「結果」の away と同じようにふるまっている。以上のことから、宮田 (2000) では、Time-away 構文の away は、「結果」の away であると主張した。「結果」ということは、つまり、「変化」を、結果構文とのかかわりで言うなら、「(時間の)消失」を表していると言える。このことから、Time-away 構文は、時の表現を目的語の位置に選択した結果構文の一種であると分析した。そして、このような分析を行うことで、少なくとも 2 つの点を説明することが可能になることも指摘した。一つは、

Time-away 構文が「時を無駄に過ごす」(cf. Sam slept the afternoon away. = Sam wasted the afternoon sleeping.)という解釈になる理由を説明できるという点と、もう一つは、この構文での away の存在の必要性についても説明を与えることができるという点である。Jackendoff (1997) によれば、「無駄に」という解釈は、(7a)に示す Time-away 構文の形式自体に貼り付いた意味であると説明されている。

- (7) a. [VP V NP away]
 b. 'waste [Time NP] V-ing'

(Jackendoff 1997: 555)

しかし、このような説明では、(7a)の形式が、なぜ(7b)の意味をもつのか、その理由については、これ以上問うことができない。時間に関して、Lakoff and Johnson (1980: 8-9) は、次のように指摘している。すなわち、少なくとも英語文化圏では、<TIME IS A VALUABLE COMMODITY (時は貴重なものである)>という概念メタファーが存在しているという。つまり、Time-away 構文の away は「(時間の)消失」を意味する away であると分析するならば、そのような貴重な時が消失するという事態は否定的なことであると捉えられるので、「浪費」という否定的な意味が出てくると説明できる。

また、away の存在の必要性に対しては、次のように説明することができる。すなわち、Time-away 構文に生じる動詞は、drink, sleep などの基本的に行為を表す動詞である。したがって、それらの動詞自体には「時を過ごす」という意味はない。しかし、構文全体で「時を過ごす」という解釈が出てくるのは、away が付加されることによって、いわゆる直接目的語の名詞句によって表される時が変化(消失)するという事態が表されることになるからである。また、away が「消失」を意味しているからこそ、(8)に見るように、通例は前置詞句などによって示される時間表現が、この構文では直接目的語の位置を占めることができるのである。

- (8) a. Mary danced for the whole night.
 b. Mary danced the whole night *(away).

Levin and Rappaport Hovav (1995) は、変化する実体(entity)に関して(9)に示

す連結規則 (linking rule) を提唱している。

- (9) 「変化する実体は、他のどの実体にも優先して、直接目的語の位置にリンクされなければならない。」

(cf. Levin and Rappaport Hovav 1995: 51)

Time-away 構文にも、(9)の規則が働いていると言える。つまり、Time-away 構文で away が義務的に要求されるのは、それがなければ、その目的語 (時の表現) が変化する実体としてみなされることがないからである。(8b)において、dance という動詞は、本来時間表現を目的語に選択しないが、away が付加されることにより、その時間表現を表す名詞句が変化するものとして認識され、その結果、その動詞が本来語彙的に選択する実体にも優先して、その名詞句が目的語の位置を占めるようになるのである (宮田 2000)。³

結果構文と Time-away 構文の関係を各々の例の比較のもとに、まとめてみたい。

- (10) a. Fred drank all his earnings away. (Resultative)
 b. Fred drank the night away. (Time-away)

(10a)は(酒を)飲むという行為の結果、給料が全部なくなったという状況を、(10b)は(酒を)飲むという行為の結果、(酒を)飲んで過ごした一晩という時間が今ももう存在しないという事態を表している。つまり、両文における away は「消失」という結果状態を合図しているのである。

以上、Time-away 構文の away を結果用法の away であるとみなし、Time-away 構文は結果構文の一種であると論じた宮田 (2000) の分析を概観した。

3. 継承リンクによる3つの構文のかかわり

2節までの議論を踏まえ、本節では使役移動構文、結果構文、Time-away 構文の3つの構文の関係を考察していく。

³ このことは、Time-away 構文だけでなく、他の疑似目的語を選択する結果構文にも一般的に当てはまることなのである。

- (i) a. The child cried his eyes *(red).
 b. Mary danced her shoes *(to shred).

- (11) a. The dog frightened the thief away. (Caused-Motion Construction)
 b. Fred drank all his earnings away. (Resultative Construction)
 c. Fred drank the night away. (Time-away Construction)

(11a-c)に挙げたこれら3つの構文は、いずれも[NP₁ V NP₂ XP] (Time-away 構文の場合には、変化でも時間の経過を表すことから away がくる (宮田 (2001))という形式で表され、「変化」を表すという点において一致する。

1節で触れたように、結果構文と使役移動構文の関係については、Goldberg (1995)によって指摘されており、彼女は、前者は〈状態変化は位置変化である〉(Lakoff and Johnson (1980), Lakoff (1990))という概念メタファーによって後者から拡張されたものであると論じている。すなわち、結果構文は使役移動構文からの拡張構文であると特徴づけることができる。

- (12) motion → change
 location → state

(Goldberg 1995: 83)

つまり、状態変化とは、ある状態から他の状態への推移をいうことから、一定のものが一定の場所に移動するという位置変化の構造が、因果関係に写像されると、一定の事態が一定の結果を引き起こす関係として理解されることになる。使役移動構文と結果構文が形式的にも意味的にも類似しているのは、まさに、今述べた理由からであり、本論文でも彼女の主張に賛成する。

では、「時間の経過」という概念は、どのように理解されているのだろうか。時間というものは、Lakoff & Johnson (1980)によっても指摘されるように、空間概念を基盤にして理解されている。彼らによれば、英語において時間は〈TIME IS A MOVING OBJECT (時間は移動物体である)〉というメタファーに基づいて成り立っているという。たとえば、Lakoff & Johnson (1980: 41)による次の例を見てみよう。

- (13) a. In the weeks ahead of us ... (future)
 b. That's all behind us now. (past)

私たちが、時間的に未来は自分の前方に、そして過去は自分の後方にあると考

えるのも、時間に関する記述のメタファーによって、ちょうど動いている物体と同じように、時間にも進行方向を前とする方向づけが与えられているからである。⁴

以上のことから、時間の経過を表している Time-away 構文は、〈TIME PASSAGE IS MOTION (時間の経過は移動である)〉(cf. Lakoff 1990: 55-57) というメタファーによって拡張されたものであると特徴づけることができる。

- (14) motion → passage
location → time

このように、Time-away 構文は使役移動構文からのメタファー的拡張であることは、以下の例からも伺える。⁵

- (15) a. He passed the ball away. (Caused-Motion)
b. He passed the afternoon away. (Time-away)

(15a)と(15b)の違いは、目的語の名詞句の種類である。すなわち、(15a)ではボールが、(15b)では時の表現がきている。(15a)は、パスしたボールが飛んで行ったという意味であり、away によって、パスされたボールの位置変化、すなわち、空間領域での物理的な移動が表されている。(15b)では、午後という時間表現が動詞 pass の目的語にきており、したがって、時間も移動(推移)する対象として理解されていることが分かる。

3節で見た宮田(2000)での提案と考え合わせると、Time-away 構文は結果構文の側面と、使役移動構文の側面を継承していると言える。すなわち、結果構文からは「消失」という側面を、使役移動構文からは「経過(移動)」という側面を継承している。しかし、各々の構文からの拡張の在り方が少し異なっている。宮田(2000)でも論じたように、Time-away 構文は、時間表現を目的語に選択した結果構文の一種であることから、結果構文とは事例リンク

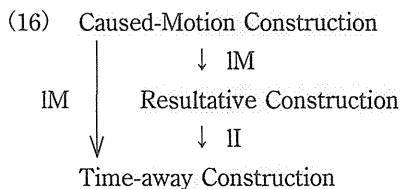
⁴ 日本語でも、以下の表現に見られるように、時間というものが方向性をもって移動していることがわかる。

(ii) a. 時間は流れている。 (吉本ばなな 1998: 104)
b. 一年がそうやって去って、また夏が来て。 (吉本ばなな 1998: 119)

⁵ (15a, b)の例は廣瀬幸生先生からご教示頂いた。

(Instance Link (II))によって関係づけられているのに対して、使役移動構文とは「時間の経過は移動である」というメタファーリンク (Metaphorical Extension Link (IM))によって関係づけられているのである。このことから、結果構文の一種である Time-away 構文が、使役移動構文とメタファーリンクによって関係づけられているというのも自然な流れであると言える。

以上をまとめると、(16)のようになる。



次の例を見てみよう。

(17) Bill gambled his life away. (Jackendoff 1997: 550)

(17)は、Jackendoff (1997) により、Time-away 構文と結果構文の2つの解釈が可能で例として挙げられている。彼によれば、前者の解釈になる場合には、away は「継続」を意味する away であるのに対して、後者の場合には「結果」を意味する away であるという。しかし、宮田 (2000) 及び、ここでの議論に従えば、この文の away は、いずれの解釈になる場合でも「結果」を意味する away である。そして、このように2つの解釈が可能なのは、(16)に見るように、結果構文と Time-away 構文はともに、使役移動構文からのメタファーによる拡張構文であるからである。つまり、「物理的移動」という空間的な領域から「状態変化」という出来事間の因果関係を表す領域にメタファー的写像が行われた場合には、結果構文としての解釈になり、一方、「時間の経過」という時間的な領域へと、その写像が行われた場合には、Time-away 構文としての解釈になるのである。(17)では、life という語の意味が解釈に大きく関与している。すなわち、life を実体としての「命」と捉えるのか「人生」というある種時間幅をもつ表現として捉えるのかで解釈に差が生じているのである。

4 節では、歴史的な考察からも、上記3つの構文が関連構文であることを裏づけていきたい。

4. 歴史的考察

語の意味変化に関して、Traugott (1982, 1988, 1989) は ‘hypothesis of unidirectionality’ (『一方向性仮説』: 仮説の訳は河上誓作 (1996) に拠る) という文法化の研究において有力な仮説を立て、語の意味は、具体的な意味から抽象的な意味へ、内容語から機能語へと一方向的に展開して行く傾向があり、その変化の際には人間の認知プロセスに関わるメタファー (Lakoff & Johnson (1980)) が関与していることも指摘している。

Traugott のこのような仮説は、Time-away 構文、結果構文、使役移動構文に関しても当てはまるように思われる。すなわち、使役移動構文という物理的な移動を表す表現から、状態変化を表す結果構文や時間の経過を表す Time-away 構文へと、体感できる変化から体感できない変化の表現として用いられるようになったと考えられる。歴史的に見ても、使役移動構文の表現は 12 世紀頃に観察され、結果構文と Time-away 構文の表現に関しては、それぞれ 17 世紀以降に観察される。尚、以下の例は、すべて OED からの引用である。

- (18) 12c- Sone se ich hit awei warp (Caused-Motion)
 1661 What was got by Oppression, will be booned away by the
 King's Liberality. (Resultative)
 1689 These Men have loitered away the Day. (Time-away)

5. おわりに

本論文では、構文文法とメタファー論の考えを取り入れ、Time-away 構文、結果構文、使役移動構文という 3 つの構文が関連構文であることを提示した。また、Traugott のいう語の意味変化に関する一方向性の仮説を考え合わせてみても、通時的にも、これら 3 つの構文は関係していると言える。Time-away 構文の away を「変化」を意味する「結果」の away であると捉えない限り、Time-away 構文の特性、及び、それと関連する構文との関係を十分には説明することはできない。Time-away 構文には、時の流れに対する人の認識の仕方が反映されているのである。

参考文献

- Bolinger, Dwight. (1971) *The Phrasal Verb in English*, Cambridge Mass., Harvard University Press.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Fillmore, Charles J., Paul Kay, and Catherine O'Connor (1988) "Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of Let Alone," *Language* 64, 501-538.
- Jackendoff, Ray (1997) "Twistin' the Night Away," *Language* 73, 534-559.
- 河上 誓作 (編) (1996) 『認知言語学の基礎』, 研究社出版.
- 草山 学・宮田 明子 (1999) 「動能交替現象における動詞と構文のかかわり」, 『平成10年度 筑波大学 東西言語文化の類型論 特別プロジェクト研究報告書』 Part I, 135-156, 筑波大学.
- Lakoff, George (1990) "The Invariance Hypothesis: Is Abstract Reason Based on Image Schemas?," *Cognitive Linguistics* 1, 39-74.
- Lakoff, George. and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live by.*, University of Chicago Press, Chicago. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) 『レトリックと人生』, 大修館書店.)
- Levin, Beth and Malka Hovav Rappaport (1995), *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical semantics Interface*, Cambridge Mass., MIT Press.
- 宮田 明子 (2000) 「構文間の継承関係についてー Time-away 構文と結果構文は独立した構文かー」, 『日本英語学会第17回大会 研究発表論文集』 第17号, 96-105, 日本英語学会.
- 宮田 明子 (2001) 「Time-away 構文についての一考察」, 『平成12年度 筑波大学 東西言語文化の類型論 特別プロジェクト研究報告書』, 511-517, 筑波大学.
- Traugott, Elizabeth C. (1982) "From Propositional to Expressive Meanings: Some Semantic-Pragmatic Aspects of Grammaticalization," Winfred P. Lehmann and Yokov Malkiel, eds., *Perspectives in Historical Linguistics*, 245-271, Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, Elizabeth C. (1988) "Pragmatic Strengthening and Grammaticalization," *BLS* 14, 406-416.

Traugott, Elizabeth C. (1989) "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change," *Language* 65: 31-55.

辞書

OED = The Oxford English Dictionary, Second Edition, Oxford University Press, 1989.

例文出典

吉本 ばなな (1998) 『ハチ公の最後の恋人』, 中央公論新社.